



研修講座 A-3 「特別の教科 道徳」を実施しました！ 「道徳科の特質を生かした授業づくり～発問の工夫～」 【講師】 岐阜協立大学 非常勤講師 河合 宜昌 さん

8月18日(火)、「特別の教科 道徳」の講座を実施しました。

今回は小学校4年「雨のバスでいりゅう所で」、中学校1年「裏庭での出来事」の教材を使いながら、児童生徒への発問や板書の仕方、役割演技など授業の流れを具体的にご教示いただきました。河合先生は冒頭、「道徳科における課題は、『教師の授業力』である」と話されました。「考え、議論する」授業にしていくためには①教師からの発問 ②多様な考え方や感じ方の交流 ③自己をみつめ、自分の考えや気持ちは、その中のどれが一番強いのかに気づかせること、変容したのならば、その理由も伝えることが大切であるとお話しされました。



子どもの考えを引き出す上で「発問」は非常に重要です。だからこそ難しさもあり、わたしたちの課題の一つになっていると思います。例えば「ア基本発問が精選されておらず、子どもの考え方や感じ方を深める時間が少なくなっている イ発問の内容が不明確で、子どもが何を話したらよいのかわかりにくい ウ教師のくり返しの発問で、子どもの思考が混乱して話せない」等です。これらを改善していくために、河合先生からア「人間理解か価値理解のどちらか1つに絞ること、迷ったときは『どちらが多様な考え方が出るか』を考えて精選すること」イ「自分が作った発問を自分で答えられるかやってみる。答えにくい場合は子どもたちも同じ。本文の言葉を使ってより具体的に考える。」ウ「教材研究の際、基本発問と子どもがより深く自己をみつめるための補助発問を書きだしておく。その2つがつながるように設定する」とご教示いただきました。

ご参加いただいた先生方には実践に活かしていただくとともに、各校で還流していただきますよう、お願いいたします。

アンケートより【一部抜粋】

・自分自身の授業をふり返ると、内容把握をたずねる発問をたくさんしてしまっていたと思いました。しかし道徳はあらすじをとらえる発問をするのではなく、子どもたちの考え方や感じ方を深められる発問を精選することが大事であると学びました。実際に教材を用いて、発問や板書の仕方を実演してくださったのでわかりやすかったです。今後授業の組み立てや発問をしっかりと考えていきたいです。【小】

・発問同士のつながりがうまれず途切れた授業を行っていることが悩みでした。今回の研修を受けて発問と発問をつなげるために人間理解→価値理解→自己をみつめるという流れを自分の中で整理することが大切だと学びました、また板書の仕方も困っていたので、河合先生の導入から最後までの流れが一目でわかる板書を参考にさせていただきたいと思いました。【小】

・河合先生の道徳はいつもテンポがよく、全ての発言に対する対応がしっかりとっていて、やってみたいと思えます。私自身、教材の理解まだまだなので、2学期以降反省を活かしていきたいです。

【中】

・受講しながら自分の授業展開をふり返りました。私は発問に対して生徒の考えを深めようとするあまり、深掘りする傾向があります。人間理解・価値理解に生徒が反応したとき、生徒同士で深められるように授業を展開していきたいです。【中】